

〔研究ノート〕

## オンドルとハングルの国にて

——僕の「韓国ノート」より——

三 谷 憲 正\*

### 1. 旅立ち

もう何回目になるだろうか。しかし、いつも韓国への旅立ちには、緊張感とわくわくする思いが混じって来て、空港へ向かう時からもう既に、修学旅行の小学生のようになってしまう自分に気づく。

1994(平成6)年11月、本学と学科に無理をお願いし、韓国の旅へと赴いた。韓国の大邱(大邱)には、家内の両親が健在である。

家内とは、以前、筑波にいる時に知り合った。結婚に際しては、始めは家内の大邱の両親、特に父が反対であり、またこちらの方も同様という状況だった。暗礁に乗り上げて、暫くは戸惑っていた。が、家内の日本での保証人でもあり、また彼女の父とも親しい、筑波におられた日本語学の小松英雄先生に御懇篤なお手紙を書いて戴き、どうにか道を開くことができた。そして一方では、僕と家内、二人の指導教官でもあった近代文学の平岡敏夫先生にもお願いして、仲人も引き受けて戴いて、漸く峠を登り越すことができたのだった。そして、京都へ赴く3月、引っ越しの準備と併せての慌ただしい中で、披露の宴を、茗荷谷にある、茗溪会館という旧東京教育大学当時からの、見るからに時代めいた、しかしその分割安にしてくれる会館で挙げることになった。結婚式には、大邱から、家内の両親が、諸々の重たいお土産の荷物を持って、やってきてくれた。両親は旧植民地時代に教育を受けた人たちなので、日本語ができた。しかし、その日本語はかなり古い言い方であり、また韓国的風土の中の女婿などは子供同様であり、更にその頃父は大邱市内の小学校の校長だったが、その職業的な雰囲気のためか、普段は聞きつけない、なかなか貫禄のある話し方で僕らに諭した。両班(両班)を尊ぶ国柄の人というのはこういうひとなのか、と「士大夫」という言葉

\* 佛教大学文学部助教授、佛教大学総合研究所嘱託研究員(平成4、5年度)

を思い起こした。

その時お土産として頂戴したのが、『三国史記』と『三国遺事』だった。二著とも高麗朝(936～1392)に編纂されたものであり、古代の日本に例えれば、『日本書紀』と『古事記』の関係であろうか。それぞれハングルの訳文が前半に記され、後半には原文の載っているものだった。その大著の重量を両手に抱きながら、父となるべき人の人柄を思った。両親は結婚式が終わったあと、関東を旅行し、勤めの関係上父だけは先に羽田から大阪空港で乗り換え、帰国の途についた。

## 2. 無愛想の風土

今回私たちの旅は、韓国のその両親の結婚五十周年の金婚式と、更に古希の祝いに出席するというのが、主要な目的だったのだ。そのため、私たち京都の家族だけでなく、郷里伊東(静岡県伊豆)の私の母と、叔母(母の弟の妻)の二人も一緒にいくことになった。

出発の日11月10日(木)早朝5時半のタクシーで京都駅に向かい、6時15分発の「はるか」に乗り込み、順調に関西新空港に着いた。そして、いよいよ飛行機に搭乗。飛行機はJALにしておいた。以前大韓航空にしたことがあったが、その時、あのスチュワーデスたちの、取りつく島のない、けんもほろろの態度に接し、もう懲りたからであった。何か聞いてみるといい。「オプソヨ」(ありません)または「モルゲッソヨ」(わかりません)、時には何も言わずに、そのまま行ってしまう。この感覚は私一人のものではなかったらしい。司馬遼太郎氏を含めた日韓の五氏によってなされた座談会『日韓 理解への道』(中公文庫、1987.12)を総括する金達寿(キム・ダス)氏の後文「理解のための直言」の中で、氏は「無愛想」について次のように述べている。

それはひとりKALのスチュワーデスとは限らない。小さな食堂のウェイトレスなどにいたるまで、一口にいえばサービス業にたずさわる者は、たいていみなそのようであった。(略)要するに、われわれ朝鮮人の体質には、商売＝サービスというものを蔑視する儒教的伝統が血となり、肉となって、根をおろしているのである。

確かに、あの不親切さと冷たさにはしかるべき文化的なバックボーンがありそうである。家内に言わせると、客の方も“飛行機女中”といった風にしか見ず、そのため彼女たちも“大学まで出て、何でこんなふうに扱われなければならないのか”と考えるのだという。多分ここには二つの問題があるように思われる。一つは韓国における

《商》の位置の低さの問題、特に接客業のあり方が顕著に出ているようなのだ<sup>1)</sup>。もう一つは《公的》な磁場における人間関係のあり方である。大抵の場合、働いている者の都合に、客の方は合わせることになっているらしく、気分の乗らない時や個人的に都合の悪い時には取り扱ってもらえない。殆ど無視されてしまい、その後にはもう次の人が、その担当の人間の都合に合う用件を依頼することになる。

かくして、それ以降席がとれれば、日本の航空会社の飛行機を選んでいる。さて、私たちの乗った飛行機が関西新空港を離陸しようとしている頃、隣座席の、日本政府発行のパスポートを持っている韓国人(?)だと思われるおばあさん二人が、JALのステューワデス呼んだ。「ねえちゃん、ねえちゃん」。韓国語で若い女性を呼ぶのに「アガシ」は全く失礼ではない。ただ日本語に直訳すると、いわゆる“異化”的な効果が表れてくるだけだ。おばあさんたちは韓国への入国書類を書いてくれと頼んでいた。離陸まじかの、おそらくは一番緊張を求められる時間帯であつたろう。しかし、日航の彼女はさすが、特殊な訓練を受けて来たスペシャリストだった。「必ず後で書きに来ますから、暫らくこのままでお待ち下さい。」といって機内の仕事に戻っていった。そして驚くべきことに本当に戻って来て、入国書類と税関手続きの書類を二人分も書いたのだった。ついでに下の署名の欄にもわたしらの名前を書いとくれ、といったような意味のことをおばあさんが言った時には、さすがの日本人も、これはご自分でサインすることになっています、といささか閉口気味だった。このエピソードから推し量ると、これから訪れる彼の地にあつては、客の方は客で頼めるところまでは頼むのではないか。放っておくとどこまで入ってくるか分からない、ということになるのだろうか。家内に言わせると「足は伸ばせる所まで伸ばす」という言い方があるのだという。とすると、何でもかんでもそのまま聞いていると大変なことになる、というのだろうか。主・客どちらが先なのか分からない。多分双方が干渉し合って、一種のハレーションを起こし、それが文化様式としての態度・仕種に表れて来るのではなかろうか。

ともあれ、日本での対人接触の“一般的法則”は実は特殊なものであると思ひ知らされることになる。

1) 黒田勝弘氏は『韓国社会をみつめて』(亜紀書房刊 1983.9)の「3 韓国的『文化大革命』」の章で、ロッテデパートの開店に言及し、次のように指摘している。「ロッテ百貨店の女子従業員たちが、客に頭を下げはじめたんですね。客に頭を下げる——これも革命的といえます。」

### 3. ボルテージの高い国

12時30分。定刻どおり釜山(부산)の金海(김해)空港に着陸した。天気が美しく、実によくはれわたっていた。タクシーで釜山郊外の海水浴で有名な海雲台(해운대)に向かう。今夜はそこの海岸通りにあるコンドミニウム(「韓国コンド」という名の)に泊まることになっていた。しかし、タクシー、である。メーターはあつてないようなものだから、殊に観光地だとほぼ毎回個別交渉になる。これは妻に任せた。何でも「3万ウォン」とのこと。運転技師おじさん(운전기사) (運転手さん)によると、韓国語のわからない日本人だといつものは「4万ウォン」もらっている、という。このやり取りは殆ど「喧嘩」にしか聞こえない。初めて耳にする日本人はたいてい、これは危ない、と思うのではなかろうか。途中で家内が「別に喧嘩してるわけではないですから心配しないで下さい。」と後座席で、並んで座っている母と叔母に断った。が、しかし、なかなか韓国人同士、両者とも迫力があつた。恐らくこの国にあっては、日本国内の「100ボルト」の電圧では足りない。120～30ボルトは欲しい。後日ソウルのホテルでたまたまコンセントを見たら、「110V」とあつて、思わず笑ってしまった。比喻ではなく、事実この国では「110V」にしてあるのだ。それくらいの血圧と体力はどうしても必要らしい。かくして、母国語のわかる韓国人の一名いる日本からの観光客も、現地の人並みの料金でやってもらうことになった。その後着くまで一時間ほどだったが、その間話しているとその人柄の良さもなんとはなしに伝わってきて、やはり韓国に來たのだな、という感じが沸いてくる。四十前位の、やや小柄のてきぱきとした人のようだった。この人には翌日の釜山観光を案内してもらうことにした。

### 4. 距離の近い人々

目指すコンドミニウムは海岸通りに翼を開き、東に海原を抱いていた。道路側に広場を多く空け、子供のゴーカート広場にしている。その広場は高いポールが一行に連なり、そのポールの先端にはさまざまな色彩豊かな旗が付けられている。7階の部屋の二重窓を開き、ベランダに出ると、下には自動車の屋根が滑るように走っていく。遠く右手の方には、「釜山港へ帰れ」に歌われている「冬柏島」(동백섬)が見える。「冬柏」とは「つばき」のこと。「島」とは言われているが、地続きである。ここからみると、海に延びた岬のようだ。左方は近くで、ぐるっと湾曲している。その山肌の向こうには、今トンネルから午後の明るみに出たばかりの列車が、汽笛の音高くやって

くる。その下に定期観光船の発着場が見える。演歌をボリューム一杯に流して、活気づけに一役買っている。正面には穏やかな11月の韓国の海が、なだらかな扇の面を横にし、ちょうど要<sup>かめ</sup>から見渡したように、建物背後からの光を浴びている。遠く沖合には日本領の対島の島影らしきものが、ちょうど目の高さに浮かんでいるように見える。日々の慌ただしい、小刻みな仕事を離れて、久し振りに味わう、満ち足りた光景だった。

さて、荷物を置いた後、遅い昼食を食べに、外へ出ることにした。直ぐ近くに食堂<sup>食堂</sup>があった。「うどん」「オデン」とハングルで書かれた紙が貼ってあったので、これなら韓国が初めての母や叔母も食べられるだろうと、その細長いやや奥まった食堂に入った。二十台半ばの女性客が二人カウンターの奥で食事していた。家内が食堂のおばさんにあれこれ聞いて、母たちに合いそうなものを尋ねた。すると、その女性たちの一人が箸で今食べている「オデン」を摘んで「イゴヨ、イゴ、イゴ」と指し示してくれるではないか。「これですよ、これ、これ」というのである。こんな場合、日本人ならどうだろうか、と自然に考えざるをえない。多分、そのまま放っておくことだろう。この相違は評価を伴う問題ではない。そこまで中へ入って行かないのが、現代の日本人の態度としての様式なのだ。韓国では人が困っているのを見過ごすことはできないし、また困っていなくとも何かがあれば躊躇せず、関わっていくのが態度としての様式なのではないか。ともあれ、人と人との間が実に親<sup>ちか</sup>しいように思われる。

これは別にわれわれが観光客だから、というのではなさそうなのだ。大分以前、大邱を訪ねた時のこと、家内の「オンニ」(お姉さん)が僕たちを豪華な焼肉の料理店に案内してくれたことがあった。早速、店の「アジュンマ」(おばさん)が材料を運んできて、赤く輝いて怒っているような炭火の上に、鉄の網を乗せて焼き始めた。オンニと妻が、女同士であれこれと話をしている。一体、どのような文脈だったのだろうか、「プルコギ」を焼いていたおばさんが、「ミグエソヨ」(アメリカで、ですか)と話に入り込んできた。オンニは「アニョ、イルボネソヨ」(いいえ、日本で、です)とごく当たり前のように受け流して、また妻と話し続けた。この時も思ったことだが、日本では常連の、よく見知った客ででもない限りは、多分店の人は客の話の中に、そのまま実に自然に入り込むことはないのではなからうか。赫い炭火の本格的なプルコギを見ると、そのことを思い出す。

## 5. 「五六島」と船のおじさん

部屋へ戻り、母は休むといい、叔母は習い始めたばかりのハングルの反切表<sup>2)</sup>を仕上げるのだという。僕たちは五歳半の娘、まゆを連れて、先ほどこペランダから見た観光船で、五六島(오륙도)巡りに出掛けた。家内は海上から美しい釜山の町を見たいらしいし、また僕の方は「釜山港へ帰れ」の、

五六島を回って行く連絡船ごとに 声を嗄らして叫んでみても

応えない 我が兄弟よ

の「五六島」を一度見ておきたかったからだ。それにしても原曲の歌詞にある“男の兄弟との別れ”<sup>3)</sup>が日本語になると何故、“恋人との離別”の歌になってしまうのか。単に大衆歌謡だからというのではなく、そこにはある種の社会的な背景がありそうに思える。

やがて船が出航し始めると、数多くのかもめが船尾に集まり、船と伴走するように飛びかかってきた。沖に出ていくとその数が益々夥しくなる。かもめの群れの大きな袋を広げて船は波を切って進んでいるようだった。これは船の人や観光客がえびせんなどを投げてやるため、その餌を求めてのことである。船で働く「アジョシ」(「おじさん」、と普通呼ばれるが、この人はむしろおじいさんだった)が僕たちの座っていた下のデッキの船尾で、かっぱえびせんを投げはじめ、そのうちまゆにひとつかみ渡してくれた。かもめたちは船と並行して飛び、一瞬中空に翼を広げたまま、静止しているかのように見える。まゆがえびせんを投げるように手から離すと、かもめのえさは風に吹かれて流れていく。彼女たちはずっと体を落とし、空中でその口に受け取る。それは、訓練された曲芸のように鮮やかだ。

目を転ずると釜山の街並みが右手に長く延びていた。山裾の町であることが海上からだときくわかる。前方には、切り立つように先端だけを覗かせた小さ



観光船といっしょに飛ぶかもめ。遠景は釜山の町。  
1994.11/10写す。

2) ハングルの子音と母音を組合せたもので、日本語で言えば「五十音図」にあたる。

3) 「그리운 내 형제여」すなわち「懐かしい 我が兄弟よ」と原歌詞にはある。

な島の岩肌が姿を見せて来た。多分これが五六島なのだろうと思い、ガイドブックを見るが、そのようでもあるし、ちがうようでもあると確信が持てない。そこでさっきの「アジョシ」に、たどたどしい韓国語で聞いてみた。「コレガ、五六島(オリュト)デスカ」。するとそのおじいさんも、韓国的な抑揚の日本語で、左指を右手で折りながら、何度も何度も、コレガイチ、コレガニ、アレガサン、と六つの岩肌を指呼して五<sup>オ</sup>六島と教えてくれた。海上に突き出た岩礁が近くにそれぞれ並んでいるため、確かに見る位置によって、五つになったり六つになったりする。釣り人が一人二人岩肌にとまっているのが見える。船はここをぐるっと廻り、帰航することになった。沖にはもう漁<sup>いざ</sup>り火が灯り始めた。11月の海は日が落ちると急に冷え出した。はるかの沖合、淡くけむる光芒は対馬の町並みなのであろうか。

## 6. 騎馬民族説

韓国では「南海」と言い、日本では玄界灘と呼称するこの海峡は確かにちょっとした船があれば、そう無理なく渡海できそうな気がする。遙かな昔、騎馬に長じた民族がこの海峡を渡り北九州を席卷し、やがて大和に入り天皇家の祖先になった、という。そしてこの建国の主人公こそ、あの「御肇国天皇(ミハツクニミコト)

と

いわれている崇神天皇その人なのだ、と。これは江上波夫氏の有名な「騎馬民族説」である。かつて、なまいきな二十代の学生の頃だった。学内のどこかで集中講義でもあったのだろうか、ある日の午後を空けて、講演会が開かれ、何の気なしに山本明夫という社会学を専攻していた友人とともに、氏の話を聞いたことがあった。その後、中公新書の『騎馬民族国家』<sup>4)</sup>という大変すぐれた著作に接し、学問・研究というものそのものに触れた思いがした。知的な衝撃は、快い敗北感に似ている。数かずの乱れた疑問。その絡まった糸が一つの大胆な仮説という回路を通ることによって、整然とした体系性を示してくる、というのは感情の高ぶる経験だった。

しかし、この考えをどうしても受け入れない人たちもいた。その代表的な碩学が、かの柳田国男氏であった。例えば『故郷七十年』<sup>5)</sup>の中の「騎馬民族説への疑問」という項で、反論の理由をこんなふう述べている。

4) 中公新書147 1967.11, 中央公論社刊。但しこの説の出現は、対談と討論による「日本民族＝文化の原流と日本国家の形成」である(1949.2『民族学研究』)。最近、江上波夫編『日本民族の源流』(講談社学術文庫, 1995.1)が発刊されたので、手軽にその当時の衝撃に触知することができる。

5) 『神戸新聞』昭33.1.8～同9.14。但し引用はのじぎく文庫『故郷七十年』神戸新聞総合出版センター刊, 1989.4による。

何故なら、南からでなければ稲は入って来ないし、稲が来なければ今の民族は成立しないと思うからである。今の民族は単に百姓が米を作るだけでなく、皇室も米がなければ神様をおまつりすることができないのである。神様を祭る時の食物には必ず稲が入っている。したがって私は、日本民族は稲というものと不可分な民族だと確信している。稲は後から来たようなことをいう人もいるが、どうしても稲ははじめから携えて来なければ、それに伴う信仰とか、慣習とかのある説明がつかない。考古学者も人類学者も、このようなことを少しも考えない。そのいちばん極端なのが、例の騎馬民族説である。

確かに、遊牧を生業とし、颯爽と馬を疾駆させる騎馬民族が、何を好んで倦むことを知らない「百姓」仕事に励むだろうか、という素朴な疑問も沸いてくる。遊牧という、乳製品と肉によって全てを賄い、言わば生きた食料とともに移動するという生活形態を発明したのは、紀元前800年ぐらいのロシア黒海の北方にいた、スキタイと呼ばれる人々だったようだ<sup>6)</sup>。こうした牧畜生活の様態をあっさり捨てて、農作物特に「稲」に頼る農耕民族に、そう簡単になれるかとも思われる。柳田民俗学がこだわったのは、やはり「稲作」だった。日本文化の根幹をなす、と氏の考えていた「稲」と、内陸ユーラシアの乾燥地帯で営まれる「チーズ」や「バター」では、どうも「騎馬民族説」は分が悪い。

ではどう考えるべきなのか。この点に関しては、僕は吉本隆明氏のこんな見方が妥当なところのように思われる。氏は、『対話 日本の原像』(中央公論社 1986.8)の中で次のように述べている<sup>7)</sup>。

つまり、九州のどこか、たとえば高千穂の峰を神体山とするその麓の地域でもいいですが、そこで何世代も何十世代も暮して、北九州から南九州にわたる沿岸地域を連結して、また少し経って中国地方の瀬戸内海沿岸に行って、またそこあたりで何世代かしてという、時間的経過を含むと考えれば、ある程度いいと思います。(略)

もともと大陸から来た騎馬民族だったとしても、そんなことをいうことが、ほとんど意味がないくらい長い世代を、九州で過ごした人たちであることは確かな

6) 司馬遼太郎氏をはじめとする、日韓の識者六人による座談会の記録『日韓 ソウルの友情』(中公文庫 昭63.6)の末尾に「日韓関係小辞典」の項目があり、「スキタイ文化」は次のように説明されている。それによると「紀元前八世紀ごろから北コーカサス、南ロシアの草原地帯に強大な騎馬民族国家をつくったスキタイは、初めペルシャ文化、のちにヘレニズム文化の影響をうけながらユーラシア草原地帯初の遊牧文化をつくりだした。」という。

7) 梅原猛氏との対談集である。初出は「日本精神の深層」(『中央公論』1986.1)。



ように、僕には思えます(「循環の死生と楯円の精神構造」の項)。

ここで重要だと思われるのは「そんなことをいうことが、ほとんど意味がないくらい長い世代」という点であろう。吉本氏は後文でも「日本列島で人類が発生したと考える限りは、どうせ大陸から渡ってきているわけですから、おおざっぱに言えば王権も民衆も大陸から渡ってきたというのは確かでしょう。」と言ひ、さらに「しかし、それは時間的にたくさん幅をとらないといけなひので、あまり早急にかんがえと違ってくるのではないか」と主張している。多分このあたりが、肯定にしろ、否定にしろ、穏当なところのように思われる。

## 7. 絶対的評価と相対的評価

ここで暫く「騎馬民族説」にとどまって、簡単な見取り図を描いてみたのは、他にもない、この説を巡っての韓国での評価の仕方を問題にしたかったからだ。もう何年前になるだろうか。まだ博士課程の大学院生だった頃、同じ研究室に韓国の留学生で鄭滲(정심)さんという人がいた。彼は僕とは違い、近世文学(西鶴)を専攻していたが、変体仮名を読む谷脇理史先生の勉強会でいつも親しくしていた。大変すぐれた語学力の持ち主で、彼の話す日本語は殆どわれわれネイティブと変わらないほどだった。日本の古い時代の方を研究する学生ででもない限り、日本人でも多分他の学科の学生、殊に理科系の学生は自国のかつての古典籍や変体仮名など読むことはないと思われるが、異国の彼にはよく読めていた。ある日、図書館のラウンジで話している折り、韓国の日本観が話題となった。それをよくあらわしている記事が『世界』に載っています、と言う。金芝河(김지하)氏の談話「改めて日本を視る」<sup>8)</sup>だった。僕は早速一階の雑誌書架の立て並ぶコーナーに行き、頁を繰った。読み進むにつれ、奇妙な途惑いが、むずがゆく背中を伝って降りていった。それによれば、「日本の文化」は一言でいうと「殺しの文化」であり、「この殺しに対する熱狂・盲信が今日の日本の傲慢の根拠」なのだという。

日本人の傲慢と自己分裂といわれない優越感とは、神道と古事記と日本書紀、万世一系の天皇国家に対する盲信を一方とし、黒船来航以後の、西欧・北米・ロシアの資本主義、帝国主義、覇権主義的な一切の物神崇拜的なものへの追従、文明のはしご段信仰と西欧に対する劣等意識をもう一方とする、二つのものの合作提携の産物です。(略)

8) 岩波書店刊『世界』471(1985.2)。

神道と万世一系の天皇の選民というまったく荒唐無稽な国粹主義者であり、同時に垂直的家父長制の熱狂的信者であり、徹底した封建主義者であり、同時に西欧文化を追慕する普遍主義者であり、北米文明に追随する新植民地主義者であり、ロシアを恐れる進歩主義者であり、中国を憧憬する復古主義者である日本が、主体的で創造的で自覚的な統一のための一切の陣痛もなしに、支離滅裂な状態で分裂し雑居する雑文化、まさにこの雑文化について空虚で奇妙な優越感をもっているのがその証拠です。

録音テープを翻字し、更に翻訳した二重のフィルターを通したものであるので、真意が十分に汲み取れないのかもしれない。だが、どうやら、日本人のアイデンティティーは「古事記」と「日本書紀」にあると考えられているようだ。本当だろうか。この国で日々生活し、そこの空気を吸っている僕らは、今現在「万世一系の天皇の選民」という意識を、金芝河氏の指摘されるように、本当に持っているのだろうか。それとも、寺山修司が、

マッチ擦るつかのまの海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや<sup>9)</sup>

と歌った、国家的な〈共同性〉に対する、深い喪失感の方にリアリティーがあるのだろうか。あるいはまた、氏の言う「垂直的家父長制」は、今日の日本の一体どこにあるのだろうか。ともあれ、ここに見えるのは、1945年8月15日までの36年間の「日帝支配」下で培ったものを、半世紀近くも変えることなく、保持している知識人のイメージである。しかし、それは、舟を刻みて剣を求む、に類いする見方のように思われた。

この論文における氏は、「選民意識」という日本人のアイデンティティーの「荒唐無稽」さの根拠を「騎馬民族説」に見いだしている。「天孫族の実体」は「沸流百済系の騎馬民族」であり、「応神天皇、すなわち神武天皇は、沸流百済系の最後の王であった」。にもかかわらず、「万世一系の神統」をうたう「日本書紀の捏造性、虚構性」に日本人は依拠しているのだ、と言う。これは激しい驚きだった。そしてまた哀しい驚きでもあった。1945年の8月で止まったままの日本認識。ここに感受できるのは、ただ「日本憎悪」の感情だけであるようだった。憎悪から発する反権力の思想とは、固定化した観念の硬化を引き起こすものなのだろうか。吹き抜けになっている図書館一階の雑誌の並ぶ書架の間で、味気ない思いを噛みしめていた。そしてあれほど日本の文化・文学に造詣の深い友人が、この程度の「日本認識」しか示せない論文を推奨する意味について考えていた。多分彼は事実の問題ではなく、〈感情〉の問題と

9) 的場書房刊『空には本』(1958.6)の「祖国喪失」の章。

して、韓国の代表的な「日本観」を教えたかったのかもしれない、と。無論これは個人と個人の対人関係を意味しない。そうではなく、例えば政府、例えば国家、といったレベルの話である。ただその次元において、「イルボン(日本)」は引火しやすい揮発性の高いタームであるようだった。

確かに、韓国内を旅していると、日本人であることがいやになってくることがある。「日帝36年間の支配」の傷跡のみならず、豊臣秀吉の愚行の爪痕までが、遡って至る所で語られている。それはそれで徹底的に掘り返され、追求されなければならない問題だ。なぜ日本という国は、近代史の過程において、アジアの周辺諸国を侵略・蹂躪という形においてしか辿れなかったのか……。

しかし、ここで敢えて強調しておきたかったのは、「強者＝加害者＝悪」、であり、そしてその反転した「弱者＝被害者＝善」という図式である。「政治」はそれでいい。だが、学問まで「政争」の道具にすることは許されない。何故なら、学問の世界において「被害者」という、どこからも批判されることのない、言わば「絶対正義」の立場に立った時、凡ての手段は浄化され、結論は出発点に既に置かれているからである。

今ここまで「騎馬民族説」にこだわって来たのは、韓国の留学生、あるいは留学生だった友人達への思いがあるからだ。僕は、寒い北の町で学生だった時の、あの知的な衝撃というべき「騎馬民族説」が、多くの反論を根拠のないものとし、定説に近い形で証明されたら、どんなにか面白いだろうと思う。しかし、学問・研究の、都合のいい部分だけには乗っかり、マイナスの説は排除していく、というのであれば、それは学問ではなく、単に「政治」の問題にしかすぎない。韓国の友人達と話していて、いつも思うのは、論拠と論証の曖昧さを補完するかのように感情的な文辞を書き連ね、ても、その程度では所謂「日本帝国主義」(現在も韓国では略して日帝時代という言葉は生きて使われている)は痛くも痒くもないのではないか、ということだ。

僕は21世紀のどこかの時点で、「国家」(近代国家)という概念は重大な変更を迫られ、ことによると、それは揚棄されるかもしれない、という想いにこだわっている。今だにパスポートというものが必要とされ、貨幣は一国内でのみ通用するという現実、西ヨーロッパの統合を俟つまでもなく、気付かないところで、徐々に地滑りを起こしているように思われる。国鉄や電電公社が民営化されても潰れるどころか、益々活力を得ているのをみてもわかるように、国のさまざまな機関を民営化できないことはなからう。国立大学、警察、自衛隊等々。そして政府それ自体も民営化されたらどうなるだろうか。

ここで僕がこだわって見たかったのは、精緻な学問的な武器そのものによって、所謂「日本帝国主義」の本丸を突くこと、を主張したかったからだ。アジビラ程度の政治主義的主張では、もう「日本帝国主義」は蚊がとまったくらいにしか感じないほど、〈高度化〉してしまっているのではないだろうか。必要とされているのは、《熱き心》を持った《冷たき頭脳》の人であると思われてならなかった。

## 8. 海雲台海岸通り

夕食はコンドの中のレストランで食べた。釜山だけあって新鮮な魚介類がテーブルに並んだ。その後、夜、温かい空気に誘われて、まわりをぐるっと散歩することにした。直ぐ横の坂道を登っていくと、踏み切りがある。これは昼間ベランダからみた、東海岸を走り、蔚山(蔚山)と釜山を結んでいる「東海南部線」の一部だった。踏み切り、といってもなんとなく往来自由な踏み切りで、注意しながら、渡る。11月だと言うのに、寒くない。母が旅行をするといつも天気がいいという。悪くなると必ず僕のせいになっている。辰年生まれの「龍」が雨をイメージするからだろうか。よければわたし、悪ければお前、では確率は100%になろうというものだ。

ここでも建設中のマンションやビルが、夜の中に眠っている。三々五々右側通行の自動車に気をつけながら、歩いていると、途中でまゆが眠くなり、僕がおんぶすることにした。明かりの少ない、異国の町をこうして田舎の母や叔母とともにまゆを背中にして、家族で散歩している、ということが、何か奇妙でもあるかのような錯覚に捉われてくる。海岸近くの某高級ホテルの横道沿いにも屋台がテントを連ねて、客を呼んでいる。黒いからす貝などが外のたらいに漬けてある。ビニールシートの中を覗いて見ると、海鮮の魚や貝が並んでいる。特にあわびやさざえが目を引く。こんなつまみで熱い酒をきゅーと一杯飲んだら、と思うが、屋台は意外と高く、一皿10,000ウォンもする。10,000ウォンは8で割れば1,250円(平成5年11月現在)なので、まあそんなものなのかなとは思うものの、普段大金を持ったことのない者には「一万」という数字に恐れをなしてしまい、見てるだけにした。結局宿泊先近くのスーパーで翌日の朝食を買ったのみで、夜の散歩は終わった。入り口の階段から振り返ると、浜辺の潮騒が聞こえるあたり、今夜も星が美しい。

## 9. 釜山観光

ゆっくり起き、支度を済ませたあと、各自トランクを持って下に降り、チェックアウトをしていると、昨日のタクシーの「技師アジョシ」が三十分前だというのに、もう迎えに来ていた。コーヒーを一緒にどうですかと誘ったが、コーヒー、そして煙草もやらないことにしているという。家内によれば、韓国人には意外と多いとのことだった。ラウンジで一服後、タクシーに乗り込む。

目的は「梵魚寺(보모)」という釜山の名刹なのだが、「アジョシ」は是非「忠烈祠」を見て行くように言う。これは、「任辰倭乱」という例の豊臣秀吉の起こした愚かな侵略、日本では普通「文祿の役」(1592年)といっている、あの戦乱で亡くなった犠牲者を祭ってある場所である。山肌の斜面を三層に分け、急な階段を作り、登り切った建物の中に横一列に、位牌を安置してある。ここからなら海が見える。この乱の時、救国の英雄として今なお韓国で人気の高い海将、李舜臣(이순신)の像は釜山にもあるし、またソウルでも見かけたが、どちらも日本を見据えて立っている、のだという。とすればこの廟も、海の向こうからいつ押し寄せるかもしれない「倭」に向かって面しているように思われた。きれいに掃き清められて、簡素な場所である。小学生達がバスで見学に来ている。色とりどりの鮮やかなジャンパーやコートで、さえずっている。空はよく晴れ、のどかだった。

「梵魚寺(보모)」は11月の枯れた山中に、乾いた光を浴びて静かに佇む、古びて懐かしい御寺だった。横道から登っていくと、国宝の本殿のある広場に出る。今もなお、求道者たちの修業の場所として生きているように思



われた。麓から来たのだらうか、「アジュモニ(おばさん)」や「ハルモニ(おばあさん)」たちが、跪き、掌を上にし、額を床に付けて、また立ち上がり、そして更に腰を落としては額づく、三拝九拝の昔ながらの礼を、仏に捧げていた。

昼食に「カルビ」を食べ、そのまま駅に向かったが、大きな海外旅行用の鞆の入る

「忠烈祠」にて。左から、母、叔母さん、僕、まゆ、そして家内である。ガムなどを捨てて、汚すと罰金を取られるほど、きれいに掃除されていた。11/11。

ようなコインロッカーがなかったので、タクシーに積み込んだまま、市内の光復洞の通りをぶらぶら歩き、コーヒーを飲んだ。自家製のパンを販売し、奥では喫茶もできる、という、例えば井村屋、あるいは長崎屋、といったたぐいの店内で、ハングルと韓国語が耳と目に入らないとすると、異国にいるとは思われないようだ。ただ何かしらの雰囲気、人々のしぐさにやはりどこことなく、わずかな差異はあるだろう。特に若い女性たちの化粧が妙に濃いのだ。ほとんど、ある化粧品会社のC.Mに登場してくる「コスメチック・ルネッサンス」のポスターから、抜け出てきたような女性が多いのはどうしてだろうか。

ようやく車は釜山駅に戻り、一日お世話になった「アジョシ」と別れる。彼は日本の満年齢でいうと38歳だそうだ。日本人をよく乗せるらしく、僕らにポピュラーな韓国歌謡をカセットで流してくれるし、煙草も車内ですすめてくれた。閉め切ったくるまの中では吸わないことにしているが、その好意だけは戴いた。さて交渉である。彼は十万ウォン欲しいと言う。家内は六万でどうか、と言う。若干やり取りののち、結局八万で折り合ったらしい。母とおばなどは、いろいろ世話になったのだからもう二万ほど心付けに、と申し出たが、家内に「却下」された。僕も母達の意見はよくわかる、がこれはこれでいいのかもしれない。このあたりのニュアンスはやはり何年か住んでみないとわからないものなのだろう。

## 10. 大邱の夜

「セマウル」号での1時間5分の旅は快適だった。重いトランクを引きずりながら、やや暗い東大邱駅に降り立ち、改札口を出ると、妻の実家の「ヒョンニム(お兄さん)」が迎えにきてくれていた。無論、僕もまゆも旧知の間柄である。が、母とおばさんは今回が初対面だった。義兄は、申義燮イムニダ(シンウイソプです)と母に挨拶した。一見何のことはないように聞こえるが、しかし、そういえば妹の夫である僕はいまだかつて、固有名詞としての氏名を直に名乗られたことはなかったのを思い出した。友人の紹介でその友人に会う場合や、公的な場で自己紹介をする際には、何のだれだれです、という言い方は当たり前である。が、どうやら「血縁」の関係の中では、年令的に目上の人には後輩には名前を明かさないものなのか。日本では、例えば太郎おじさん、とその名前に親族関係を表す名詞を付けるのは普通であるが、韓国でそれをする、特に大邱の妻の家では、叱られるらしい。韓国内の親族名称の複雑な体系は、ラテン語の活用語尾以上の多彩と多岐にわたる豊穡さをもたらしていると言え

よう。今ここにいる「母の弟の奥さん」は日本語なら「おばさん」であり、限定するなら、住んでいる場所(伊東市内の荻<sup>おぎ</sup>)をプラスして「荻のおばさん」となるだろう。但しそうしても、そう紹介する人とその「おばさん」との関係は定かではない。しかし、韓国語では一言ですむ。曰く「ウェスンモ」(外叔母)である。「外(ウェ)」が付けば、それは母方の血縁を示すことになる。しかも母とおばさんが実の姉妹であれば、家内はおばを「イモ」と紹介すれば事足りるのだから、血の繋がりはないことがわかるのである。

ともあれ僕たちは駅で簡単な紹介のあと、義兄のくるまで、大邱プリンスホテルに向かった。一先ず部屋に荷物を置き、その後下へ行くと、今度はこのホテルの予約をしてくれた、家内のお姉さんがやってきて、ホテルの会員証でチェックインを済ませた。義姉は大邱市内の短大で音楽関係の先生をしている。音楽大学に通う娘と高校生の息子二人のお母さんでもある。釜山のコンドミニウムは、このお姉さんの義理の弟に当たる人のお世話で使えることになったし、大邱でも見えない所で動いてもらっていたのだ。あさって行く慶州の宿泊先、あるいはソウルのホテルも知人から知人へとリレーで、部屋を準備してもらっていた。やはり、大邱の両親の古希と結婚五十周年のお祝いに、日本に嫁いだ娘の「シオモニ」(姑)が、「ウェスンモ」と一緒にやってくる、というので、このように手配をしてくれたのだ。この、人と人との関係の濃密さは、現代日本の空気を吸っている僕らには、とても測量しかねる深さのように感じられる。果たして僕らはこのように遠方からの親戚縁者、あるいは友人を歓待できるのかどうか<sup>10)</sup>。

やがてくるまは、大邱の街がやや静かになる南側の住宅街の一角に止まった。石と煉瓦で作られた重厚な家が多いのは、やはり冬の厳寒を考えてのことだ。家の作りは夏を旨とし、「冬は如何なところにも住める」<sup>11)</sup>というわけには、ここでは行かな

10) 最近出た、吉田博司氏の『朝鮮民族を読み解く』(ちくま新書 1995.1)は好著である。「一、密着と疎遠」の中で、韓国社会の人間関係について次のように指摘している。「わかりやすく彼らの友人関係の原則を述べよう。それは一言で、友人関係を保つには相手に徹底的に迷惑をかけるということ。しかし迷惑というのも日本的な発想なのである。彼らの側からいえば、ほんとうに迷惑なら友人ではない、という論理になる。したがって真の友人にはいっさい遠慮しないことが愛情だ、と彼ら流にいいかえたほうが麗しい。突然来訪するなどというのは最もよい愛情の示し方である。これこそ親密の極みである。」このように分析した後、さらにその「反対給付」について次のように述べている。「しかしこれには反対給付がともなわなければならない。むこうが来たときには同じような歓待があることが前提にされているのである。」「先方が良くしてくれた分だけ、あるいはそれを越える心遣いがない限り信頼関係が築けない社会なのである。」

11) 吉田兼好『徒然草』「第五五段」(引用は古典集成本『徒然草』新潮社刊、1927.3による)

い。厚手の板の門扉のインターホンに告げると、スイッチが入り、留め金が金属音を立ててはずれる。中に入ると家の玄関も開かれ、急に賑やかな声が明かりとともに庭へ溢れだしたようだ。大邱のお父さんお母さんと会うのも久しぶりである。ホテルから一足先に着いていた義兄、その奥さん、そして子供たち、更に家内の弟さんとその奥さん、そしてさらにその子供たち、が玄関を入った直ぐの板の間(マル)にあたかも人垣を連ねるかのように出迎えてくれている。挨拶やら紹介やら、何が何だかわからぬまま、父母の居室兼応接室とでも言うべき「内室(アンバン)」の、テーブルに並べられた山海の珍味を盛ったと思われる数々の大皿の前に座った。改めて挨拶をした後、乾杯となった。四方山の話が出て、さまざまの事柄が話題になった。そのうち家内の弟である申徳燮(シンドク)氏も見えた。この人は大邱市内の嶺南大学の医学部で整形外科医をしている。ふっくらとユーモアのある人柄で、末っ子のせいもあって、みんなから慕われている。そうこうしていると今度はお姉さんの旦那さんもやってきた。やはり市内の慶北大の工科大学(日本で言えば「工学部」)で教えている。大阪大学に以前留学していたこともあり、日本語のわかる、妻の義兄である。父親の前で煙草を吸えないのは韓国の仕来りだが、もう十歳くらい離れると、父同様になるのだという。しかし日本での生活の長かったこの義兄の「ヒョンニム(お兄さん)」は煙草をすすめてくれたりしていた。こうして人が訪ねてくると、家族はみんな総出で集まってもてなすのがこの国にあっての遇し方なのだ。

## 11. 古希と金婚式

さていよいよ本来の目的である、晴れの式、当日になった。この日のために大邱のお母さんは、娘三人と二人の息子の嫁、合わせて五人お揃いで、天女のワンピースを思わせる「チマ・チョゴリ」を誂えた。まゆも、小学校に通うミンジョギお姉ちゃんのおさがりのチマ・チョゴリを来て、すましている。会場の大邱ガーデンホテルの二階に行くと、もう両親が来ていて、宴会場の手前で出迎えの立礼をしていた。お父さんは、落ち着いたグレーのスーツに赤系統のネクタイをし、胸に桃色のバラの花をあしらっている。お母さんの方は娘たちと同じお揃いのチマ・チョゴリの上に、もう一枚「羽衣」を重ねている。胸元にやはり同じピンクのバラである。中に入ると、家族親族席が、最前列の両脇に置かれているのが、やはり日本とは違い、お国柄を思わせた。妻が呼びにきたので伊東の母と叔母をそこに置いたまま、会場の入り口の廊下立っていた。そのうち式が始まった。当日の主役二人を先頭に、小さい孫たちが横一



列に並び、兄弟姉妹が夫婦で入場する。僕も無論家内の横にいた。両親たちは拍手で迎えられつつ入場し、やがて正面の簀子を敷いた上に、靴を脱いで安座した。手前には深緑色の布地を被せた「座り机」がしつらえられている。駅に迎えにきてくれた長兄夫婦が、先ず進み出てお酒を捧げた。日本で言えば、結婚式の三三九度のような様子である。長兄の後は、次男夫婦、そしてお姉さんたち。とうとう僕たち家族の番も回ってきた。まゆも一緒に三人で、おじいちゃんにどうぞ、と捧げる。最後は妹一家で、これで一巡した。



祝宴が終わり、参加者にお礼の挨拶を、長男(左より二人目)がしている。舞台には「祝 申東煥 尹泰熙 夫婦 古希および金婚式 祝 94・11・12 (株) ガードゥンホテル」とある。

恐らく、これは儒敎の礼法に適う式のやり方なのだろう。「チェサ」という先祖を祭る時の仕方が多分基本になっているようだった。主賓に最も近い家族のテーブルといい、息子娘夫婦、さらには孫まで引き連れての入場といい、この「血の繋がり」を最重視した韓国社会の行動様式は、良いにつけ悪いにつけ、僕たちが置き去りにしてしまった「何」かを思い起こさせるものではなかったのか。この会場でも、多くの人々にあった。家内の紹介する「だれだれのお姉さんの旦那さんのいとこの何々」と進むともうこちらの、日本ふうの頭では辿って行けない。しかし、どの人に会ってもなにかしら、「懐かしい」。この人懐かしさはどこから来るのだろうか。そんな時、柳宗悦の大切な一文<sup>12)</sup>が想い出されてくる。

人は生まれながらに人を恋している。憎しみや争いが人間の本旨であり得ようはずがない。様々な不純な動機のために国と国は分れ、心と心とが離れている。不

12) 柳宗悦「朝鮮の友に贈る書」『改造』大正9年6月。但し引用は岩波文庫、1984.11による。

《補注》大邸の家内の実家の家族関係を『族譜(しよこ)』の中から引用すると次のようになる。父は、三十五世の「申東坡」,「晩坡」と号す。その下に二男三女が並んでいる。家内は三十六世の列の左から二番目である。僕は彼女の夫として「夫高憲正」となっている。やはり「三谷」という名前ではまずい、ということで、母方の姓「高島」の一字をとって「高」とした。するとその姓は必然的に「濟州島」が本貫ときまっているから「濟州人」になった。ちなみ

[illegible]

に「教授」とあるのは、大学の教員(教官)は職階に関係なく普通「教授」と呼ばれているからである。